

一語一言 事目

女

大政官文庫			
		一	和
		四	書
		九	
八	一	八	門
〇	三	〇	
冊	架	函	號

内閣文庫			
		一	和
		四	書
		九	
二	一	八	類
二	〇	〇	
函	冊	架	號

内閣文庫		
番號	和	11498
冊數	80	( 43 )
函號	212	275

内二七六八五號





教部  
文庫  
白

一 話 一言卷之三十四

目録

内一二七八五號

一 帳中書 秘藏書 添補方里編トアリ 二十七條

放翁目録

春字

文庫

スツナシノマロウトタケイ

相国寺雲頂院收書帳

一 ナカラノ橋ノ秋

浪屏宛情

一 魁木大字

一 晚猿

文鳳  
堂印

同書  
同書  
同書



一 頓塵馬

一 市ノガカシラ

一 弘子永高傳

一 端身

一 誓婚

一 三十一夕

一 山谷友万里  
權造

一 水師

一 日本玉信

一 恒梅

一 九介

一 因

一 川徑菴清規

一 公文

一 竹枝歌一里方有參

一 冥壤

一 魯直年談顏

一 早吾居士傳

一 同墓表

一 同示

一 余松函

一 揚休坐集



- 一 木香花
- 一 鴨頭草
- 一 法華年号
- 一 東画室隈有依帆術
- 一 コヲルド
- 一 之七
- 一 洵夫壘
- 一 橋葱
- 一 方竹
- 一 本ヨルコ
- 一 人奉

- 一 陶侍
- 一 通本祿原均化
- 一 寛文中大坂以天守書文出浪急状
- 一 池田氏隨笔
- 一 南堂圖每十四年例貢焉
- 一 射鞬孤鞬
- 一 古人頭画畫了門首
- 一 星谷
- 一 本海寺
- 一 赤湮瘡
- 一 柿蒂 後文



一 黒田真女中六御写 大津約伊織書貞節十九奉

一 長濱神作織信并書返武比奈去行

一 肴品ノ一

一 三灯寺暮

一 靴与者屋敷研

一 芝青私寺古墓河口三八

一 勾股全昏

一 笠澤

一 為悲當

一 小倉久安

一 嵯峨宗悧

一 春季観賤行信

一 実ヶ原御祝仕立場

一 柳澤若保侍

一 蒲室集

一 春抄四月朔日



一詠一長老之字曰

一劉後村文集云昔梅聖俞日課一詩余為字若作行狀

去家以陸故翁手錄詩藁一屯為潤筆頗其前云

七月十一日至九月二十九日計七十八日得一百首

陸之日課尤勤於二公室貪多或廢之熟者必指

理勢然也 張中書公 二月三日雪中

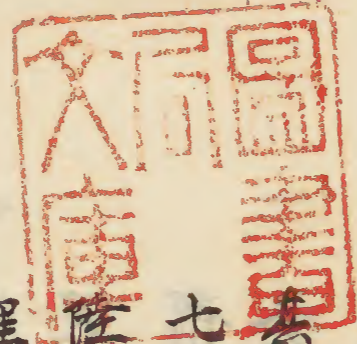
一山谷詩雁行飛上猶回首不受青雲富貴吞先奉

云此篇吞字華嚴合論天地日月有時為吾常見

吞大覺世尊為吾常見吞云々此篇吞字華嚴內

一西谷詩十字依麓一水賦蒼彌麓即詭之及之此

篇如无咎之寫好事也无咎惟其家其窮困好詩





若未則十字之箋一水之若粥或以沙一聯  
 為公之事非也同上  
 又含亦繁我羹含後荒昔若此一聯ハスツカ  
 口イ夕ル体ヲ云  
 一同竹正國ニシテ紅袖寫鳥絲 困史補宗亮間有織成  
 界道謂之鳥絲欄 持圓源以鳥絲欄為紙也某  
 謂鳥絲欄者指實見之冲寂純和尚所看鳥絲欄  
 金剛般若經京師相國寺雲頂院有之素絹而以  
 黑絲作卦故云鳥絲欄也 異國集云霍少玉傳  
 云玉笈絃之帳雅好侍看筵箱象硯皆王家之田

物又取佛教中手戲姬鳥絲欄素段三尺以授李

生李益也 同上

一如率事 本朝十カラノ格ニ用人柱吾人ノム  
 スナノ款云「毛ノイハナハナカヲノハニ  
 ハニヲナカスハキニ毛イラレサヲ云同上  
 一山谷待銀屏宛將復宛特意根雜按如薤本  
 竹膏ホウク張レ屏風口ヲ席ノ生交ナリト毛  
 對妻妾則妾習可萌葦况銀屏宛將トクルリク  
 ト夕テマ口ニウス香ヲ夕イテ其中ニケウカ  
 ル義人射セハイカナル秋迦達磨モ興ヲ棄ス  
 ヘシ又云山谷所以載陳之書也中畧ク子キリ



ヤウニ言フタレトモ山谷モ亦又送彼戒同上

一 豫章文集有二種其一邪魁本大字ト標額セリ

モ是ナルヘシ

一 鶴字剖的マトノコマナク也 同上

一 陸梁ハ文選ノカタテ讀ニラトルトヨムイキ

ハ夕ハリ夕ル形ヲ云 同上

一 罵人曰晚捺者彼邦ノ諺也枳如本邦罵人曰人

畜生曰人癩也晚ノ字ニ餘同字注云癩也フ夕

ツナル也 同上

一 山谷傳看高馬頓凡塵亦思敗家洗袍袴

頓塵馬トハ馬ノ口ヒヲウツテ云也馬ノ

頓塵者人之浴スル意也或云馬頓凡塵之時其

首必着地犹如人之頓首而其首至地頓去声

虞伯生翰林珠玉集有騎衣塵駝因帖云驛駝食

栗石每既立伏臥未汗如洗脱羈展脚聊自恣塵

死飛塵隨牙死君不見春雷起蟄為霧推雲為瓦

河水 見虞家塵駝因帖知頓塵ノ義自氷解矣

同上

一 卷ノ書必之ノ師匠平ハ本邦ノ市ノガカシラ

ナリ 同上

草云度訓藝文産ノ店ナトイヘル度ノカニ

ラナルベシ今モ致傷ノニ度ガニラト云各ノユレリ



一 僧灯錄私子和尚伯海私室我月明輝同上

一 嬌容トハスレメイテヒムニヤムトスル者ヲ

一 允男附卿家謂之贅替夕トヘバ人ノ才ニフス

ヘコフノクカ如云同上

一 俎祭マナイ夕トモ訓サクトモ訓又ハツカサ

トモ訓又同上

一 山谷戲答王定國歌門西絶句

頗知允舞舞竅鑿我々塊然如帝江死表旌旌蜂

唯快惊同时和目不作雙

謹白山谷殿道者の夕チカヘリコソコワウ

サウヘ

一 口侍来款窮肝水餅嚼氷蔬

水餅即湯餅之類而野物款本邦御啓云小麵餅

之水ツケモ工ノ之以麵麦粉造モノ皆謂之餅

也氷蔬ハ凍損之菜蔬也同上

一 羅大維霍林玉落雨集笈四云日本國僧匡此四

字類也。余小年時於鐘凌遊進日本國一僧安

学自言難其國已十年類考記一物為餅乃因念

備其苦不食查左云々同上 羅似好車靴踏之

の殿羅羅派之且又令知月中僧勅也乞之近來

一 葱豆作烏鹽作白 注梅實ト以塩殺白梅ト蓋



本邦以塩屋教白梅为梅叶 叶字祀訓曰梅法  
叶ノ二字叶一字祀也同上

一 丸釘食卜八天子不契以丸枚之牙盤餐之具  
饌本邦諸作往之用也同上

一 因九輦切呼兒为因又急歌切古文月字唐則天  
皇后作因也此字亦則天皇后製之同上

一 善应回師幻住庵清規云

凡一日夜之間四次坐禪之路互屏心純慮自念  
忘緣深究死生力竊道業除大小便利不許考俗  
石許洗悅不許補綴不許看讀乃至一應雜務非  
云界善情俱不許作凡上麻下地如壘入戶如隘

此履為然勿佛障草如物甚道心自然内外相資  
身心寂然矣  
山谷履舞如度顯降因聖的白履冰色く信与  
中各清規監深履為踏合口上

一 除昏則給事中司之除昏者本邦編捕之可謂公  
文等是也奉行版尾布施等力キアシルモノ也同上

一 竹枝歌或云コキリコ或云持竹枝歌如一里方有  
条或云ムキウキウ夕也同上

一 章梅三休待抄云竹枝和日本二于坂下ノ条リノ時  
ニ神ヲ迎ル者トモガ年ニ竹枝ヲ持メ雖テ唱

ヘテ曰ク有條素ヤレ一里方有條竹拍子坊



々ト云リソレヲ今ハ武具ヲミタ、ナテアラ  
ケナキ婆ニテサワラビヤセクト云ヅワレテ  
モ神ハヤウガアルヅ密帳中巻をんるついでよ  
如一里官有祭より少くもりてえの年抄写セ  
一之体信抄と思ひひてゝゝゝをせり抄抄か  
くそい世信の念解一うゝゝゝゝゝゝの夜も  
くゝゝゝ事抄写へて一生と送るも又わゝゝ  
月並の花より夏川の面中ゝ江戸山王宗の佛を  
あぐさるゝ

ふれやま何いひひやせま業丸  
と何いといふれゝゝゝれを 寛平四月七日記

一 冥懐目ウクイフサイテ子ニルヲ冥々云

一 叙別各等院注云在別南門即魯直心元符因寓  
居作喬木菴注某謂天社年信云作橋木寮死灰

菴。今存存其寺額而魯直年蹟 同上

以上二十七條帳中番ヨリ抄あり

一 新庄直彰 後河原直忠位下  
宮内少輔 又五昌の細川右衛門大進時元

こカレ横洲 柱多三好長慶ト致こ六月十二日死

所没トテ人同死 長十三年十二月 大権現川越

放鷹ノ次直彰死んせしニ仰田下徳圓海上、一人ノ

隠者アリ其心質直メあや脚ヲズ成利ヲ食ル

一 ナニ一瓢舞ヲ新抄抄里人ノ始ルあやウケ食



トス孰筆定トイハ氏末北心ナニニ好敵ノ者  
ト聞及フ直彩力又ハ往年接取白口ニテ歿死ス  
其時ノ事彼者能知レベニ汝海上ニ往彼者ニ逢  
其事一ヲ安ヘニト直彩乃海上行キ彼隱者ニ尋  
ニ二年七十余ノ素川法華修ヲ備エテ居レリ名ヲ  
惣歸居士ト云直彩お依リ次江口合戦ノ事ヲ傳  
出セニ新任ト云人歿死ニ家来ノ者ノ首級アマタ  
実檢シタル由ラ云直彩流涕メ曰吾新庄ハ其力又直  
島ト云者之居士是ヲ安警歎久其彩ナツカニサノアリ  
居士力姓名ヲ聞ケレハ吏ニ云ハス其彩又問フテ  
云其舎錢ノ財金幣ヲ施リ修營ラト知セニ武者

アリト安是雅人グヤ居士長曰某之ト修姓名  
ヲ告ス直彩川越ニ詢リ由ラ云上ニケレハ

大権現甚御威アリトツ

右實承流家系圖 系承氏秀卿流

里人ノ説云居士茅屋ノ梁ニ藥品ヲ藏置里中  
痛者アレハ是ヲ与ヘ以テ藥ナリト

右碑在下徳圓海上郡圓福寺堂側

歐陽公於修廢昏乃集金石古刻之有益於史者  
以鑿正曰昏悟誤今居士號家儒作德政而碑則  
其所製乃作卑墨也亦古刻之有益於史者然則  
金石之蓄豈特好古之具而已哉



印南誠



白吳早器居士

印南誠

千時文祿五年申六月十八日

山城國住

為送終施主敬

右早器居士碑考亦大塚印南送唯助の所藏と

ゆゑに 二月二十日清朝

一 三月初日針倉中より江民古書の

携へ来りて其書を以て早器居士の

依園海と題し流石版村高橋寺より

云諸家系系と何れを以てしとて

一 早器居士の碑を以て早器居士

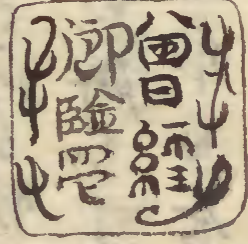
と題し一昨日世碑を撰寫せし今日の

とてし九月の

二月廿日



一 佛あり一画と知らしむ新嘉金山松寫しあり  
ふく一印あり 曾徳源院より事あり



西ハ本芙蓉よ譜あり三月十四日記

一 揚徽齋待集の唐印ハ系初建仁寺ハ一印の  
阿ノイ印よあり世よあり多しの寫印ハ係字多  
糸事牧野君ハあり今印を寫させ授合せん  
すねこと年を記すりありありあり

五山堂 常徳相孫字の信之 三月花日

一本香花 花院曰一名鈔棚兒藤蔓木附葉比三蓋

薇細少而繁四月初園花每顯之其根甚香甜可  
愛者尾紫心小白花若黃花則不香而者心大白  
花者香味亦不及至若高架萬條如香雪亦  
不一下於蒿薇剪條杆種亦可但不易活唯攀條  
入土壅泥壓獲待其根長自本生枝外剪斷移  
栽即活臘中喜々二年大盛○漢屋上品即紫心  
小白花ノモノナリ此相庚辰年始テ是ヲ侍テ官園  
ニアリ予園中亦植之 旭侯相類  
品階  
さきの園田寒泉の庭にあり一枝を乞得く  
予の庭に挿し置りて生長し一枝を生れ  
とてりて花を咲くを見たり 庚午四月十三日  
病園書



此年庚午  
四月望始  
見白花土  
中四月花  
盛開望  
如香雪

一鴨跖草 和名ツキタサ又ツユクサ又アラハナト云  
備政方言カマツカ近江彦根方言コエヤタラ  
ウト云色ノモノアリ白花青暈ノモノアリ淡  
碧ノモノアリ○琉球種葉短メ根理多ク花葉テ  
小ニ異品サリ○近江栗本郡山田村産葉長六  
七寸花辨大サ寸ニ近ニ土人多植テ利トス六  
月十三日ヨリ七月十三日至テ花ヲ採ノ候ト  
ス奉<sup>テ</sup>家<sup>ヲ</sup>御<sup>ニ</sup>出<sup>テ</sup>花ヲ取リ<sup>テ</sup>汁ヲ搗<sup>ル</sup>リ<sup>テ</sup>紙ヲ濡<sup>シ</sup>是  
ヲ青<sup>ク</sup>紙<sup>ニ</sup>紙<sup>ニ</sup>抄<sup>リ</sup>四方ニ鬻<sup>ク</sup>其製<sup>法</sup>阿<sup>リ</sup>抄<sup>出</sup>ス<sup>日</sup>固<sup>ヨリ</sup>  
一南都法隆寺造釋迦銅像化法聖元一年歲次辛巳  
十二月鬼一前太后崩年二月廿二日上官法皇

抗病弗愈于食王后仍以勞疾並一差於時王后  
王子等及諸臣隈一懃懃毒共相奈願仰依三  
寶當造釋一像尺寸王才蒙世願力轉病延壽  
安一住世間若是定業以背世者往登淨一土早  
昇妙果二月廿一日癸酉王后一即世翌日法皇  
登遐矣未年三月中一如願教造釈迦尊像并使  
侍及庄嚴具竟來斯微福信通知識現在安隱出  
生入死隨奉三王紹隆三宝遠其一彼堺普遍六  
道法界含識得脫苦像一同趣善授使司<sup>ヲ</sup>報首  
止利佛師造



一 随國の子孫新傳は東宮監中有治胤湖一傳  
 多、未同其東宮監中は何老負く所、此言  
 圓刻ありて僻書より以他日考索す下四月五日  
 一 コラト 和名ニヤムデイトは和名年暹羅人長崎  
 指桑紐た本邦人其用ヲ知ナル力故ニ是ヲ買フ又  
 因テ暹羅人は海の中に投ス今稀ニ長崎海中  
 ヲリ出テアリ故ニニヤムデイト云研ヲ画色ニ  
 用テ赫黄色成テ又秋景中山腰ノ平坡草石ノ  
 細路深林系亦又ハ松幹ノ於水物を用テ其好ナリ  
 切邦ノ画敷銀朱墨及木ニ和ラ合テ其色ヲナス然レ  
 碟カシラノ子中ニテ銀朱ハ沈テ底ニアリ及黄ハ浮テ上ニアリ

畫ハ中ニアリニ和交リカタニ澤土ニテハ黄黄中代  
 赫石ヲ加テ赫黄色ト名ク是亦代赫ハ沈ニ及黄ニ  
 浮ムコラトノ自好色ニニカス。畫塵上品。豆毎  
 田方郡湯力島産上品辛巳歲予始テ是ヲ治ス多  
 主品中ニ具ス平實旭侯御教  
 不陸奇  
 梅世画具の中ハ旭侯の如己物ハ電侯ニ安川に於る  
 へ  
 一 三七一名山漆來聖田世藥進時始出商人里中用而  
 金瘡要藥云有奇切物スルニ世王ノ切邦ニ是昔ハ  
 ナカリニニヤ駿府政事録ニ曰慶長十六年辛亥八  
 月十二日金敷出雲守ノ下重初テ越山漆系其葉



三七而老見亦州傳曰國能相國之云々今ハ世ニ多ク  
相類不隨老也

梅沢サノ  
香ナシト云

一 洎文藍 ラテイニ依サフラニ紅光依フコウリスニ  
アリス又コロウクスヲリエニタアリト云母物生草  
夕上テナシ紅花垂園ヨリ来ル東聖曰高紅花也西  
唐回花西及天方國屏波地紅藍花之類スルニ其  
大ナル條ナリ洎文藍者回花ナルカ乱李氏モ其  
竹物タルトナ知ス花色紅ニテ既紅花ニ似タル  
ヲ以テ妄高紅花ヲ以テ命久近世紅花人トシヤ  
ウスト云者中系ヲ著ス洎文藍ヲ園スルニ其條  
ナリ根葉山慈姑ニ似テ五瓣ノ赤花ヲ実タ垂園ヨ

リ来ル所ノ洎文藍ハ脚長花ノ莖ナリ紅藍ノ類  
ニハアラス有同ク也

洎文藍  
此二同以  
紅毛草  
臨



一 橘葱一名沙凡葱和名ニ子ニ子ギ又サニカイ子ギ  
トモ云救荒本草曰橘子葱苗葉根葉俱似葱其  
葉指頭又生小葱曰五枝ト墨生ニ四層故名橘子  
葱不似子也指下小葱裁之使信ト此物葉ノ末ニ  
根ヲ生ジ又葉ヲ出ス一霸五樹ノ枝ヲ出スガ下



之甚矣品ナリ京都希ニアリ其由テ出ル所未詳  
壬午至品中予具おれ西陸

予云年玉川のほろり梅樹那百草村の一農家

くく其樹葱と云ふ人々名を宣ハカルワサ

葱より少く云ふ一もあううきあう一もう

はと其名と云ふ事とゆくう徳去の之今よ

ありの庚午四月

一方竹 和名ニカクダケ竹傳曰嶺方而有如削成而  
勁挺堪の柱校示異也ト其幹方ニテ馬鞭系を  
如草ノ莖ノゴトニ和産チテ○琉球産壬午あり  
中下野園郡那依久山白山松嶽具之物敷也

古要倫  
云考載凱  
之竹傳有  
出千藤種  
竹出西  
蜀断江祝  
別看西湖  
花多峰

梅予が唐花園中よりとり一方竹ノ種アリ秋筆を  
生み出た天より久路の方枯葉を葉を生せし系  
ハ其とてくすも之竹以方竹もくなくくくく  
今いし思ふ事あり

一 キヨル口 紅先人指後ル其下スルよりフラスコノ

口ニ用ルモノ其質軟ニテ甚ニマリヨニ紅先傳

擇ノ口ヲホロツフト云故ニ和人聞信テ其物ヲ

ホロツフト称スルハ傳也おれ西陸也

一 雲谷新化云今以相遠謂之人事韓退之有奏

韓弘人事物状蓋自唐己有之云○草梅あり



因古文孝經序有或以人事積索之皆別自漢  
已有之

一 陶淵明集雜詩十二首其十二  
松標涯嶽秀  
童子年始三五間喬柯何可倚  
毫毛含津氣  
繁  
強有心理

東坡和陶去此篇

私曰陶公自有此物松文去三有物  
賦類兩彼巧吳其為人務公素肯  
母而既風水之情唯至茲不和而何

粟按此詩借氣不與陶公他作類也恐好亦者假  
託之乎

信方菴の江渡集の初も少年の語あり

一 道本律師 荳序 菊海草云己亥夏六月初尚應聘

日本住持長崎宗福寺あり其己亥ハ高橋四年

カク

贈別鶴齋日本郡公丹波寺解任歸來郡

賀茂能石河公去佐寺重住崎陽

按累代武隈 享保二百年五月廿八日沖使表

三ツリ任同十二年 未定二月十三日解

長崎寺あり 作千所

日本郡丹波寺

後元文三年三月子作千所死人々其妻あを雲之  
家流儿石河寺住子不見其任とあれハ二在初月  
也



あはれよきりくく水の道木の御記の事係り年ふお  
遠く侍重堂集経の月神二年回改化光ある  
ハ修造り組森の竹支那言信本孫師道成十年  
任長崎又他是るハ事係り申年の次の竹多し  
四月廿四日出

一 寛文中中大坂の天守雷火を焼失の節は戸数  
の追記を状写す

形以て其具不而跡意を以て  
此未蔵の徳物系凡の記す

山形

此二日秋成上列より苗地雷電亥申刻に天宮上

く言高火を焼より成り申刻に以て御中  
上は其以後の天宮不跡意を以て  
形以て其具不而跡意を以て  
此未蔵の徳物系凡の記す  
申年今二日辰申刻に徳物御中上は其加書元  
精出より大く其徳物系凡の記す  
わし中上は其徳物系凡の記す  
あはれよきりくく水の道木の御記の事係り年ふお  
遠く侍重堂集経の月神二年回改化光ある  
ハ修造り組森の竹支那言信本孫師道成十年  
任長崎又他是るハ事係り申年の次の竹多し  
四月廿四日出

三月乙巳申刻



久保平左馬  
 浪色瓶後書  
 石丸石月  
 彦坂  
 松平豊前守  
 浪色丹後守  
 板倉田孫正  
 青山園膳守

酒井非由良氏  
 河初左後書

- 一 胎葉天流書
- 一 久保平左馬
- 一 浪色瓶後書
- 一 石丸石月
- 一 彦坂
- 一 松平豊前守
- 一 浪色丹後守
- 一 板倉田孫正
- 一 青山園膳守
- 一 石焼先
- 一 石中多
- 一 石中多
- 一 系流
- 一 寺家

是の案山の時ありし傳下意なき者傳又の時人  
 青平他より来りて石化中又の石外に住居久し者有



竹白り寺より其ノタル者ニテモナク家系ニテモナク  
其ノ所ニ居テ其ノ孫お徳ヲルヤ夜、寺家、彼等ノ如ク  
有是ルモノモ、ラ、爾等ノ云、今、在、別家ノ人、其ノ如ク者  
下、あ、入、ル、あ、事、其、時、い、け、寺、を、捨、り、ス、ル、チ、リ、モ、上、ハ、花、目  
代、法、師、ニ、テ、ト、ナ、リ、是、能、修、修、

一 寺ノ方ノ云、因、テ、崇、因、ヲ、修、之、ハ、因、ヨリ、意、下、居、テ、其、之、  
和、田、寺、以、云、今、附、ア、イ、ト、云、ハ、意、ノ、修、云、也、

一 鳥、園、生、目、村、ノ、云、ア、リ、此、村、生、目、ハ、修、ク、云、有、是、ハ、景、  
清、ク、ル、所、の、あ、眼、ヲ、入、ル、ト、云、リ、今、ハ、修、レ、カ、妙、モ、ト、事、其、其、  
一 石、蘇、依、ス、イ、セ、シ、リ、ト、云、ハ、修、之、右、根、ノ、皮、と、云、ス、リ、  
ツ、ブ、ニ、水、ヲ、以、テ、入、ル、水、甚、ク、以、テ、コ、ニ、テ、右、ノ、ス、ル、ニ、水、ヲ、加、

一 へ、テ、ト、キ、テ、ヨ、シ、又、壺、ニ、入、テ、修、是、時、ハ、幾、年、も、持、之、  
一 糸、加、比、其、の、神、事、ニ、サ、イ、ノ、セ、ト、云、有、ク、



重出

竹白り寺ノ云、  
五能修修

一 竹、福、院、糸加比其ニ、ハ、フ、之、意、ノ、因、ノ、一、先、ハ、吉、田、誠、約、相、好、ヲ、  
建、タル、ヲ、其、後、ノ、修、修、古、田、氏、ハ、不、修、モ、テ、南、寺、ノ、修、之、  
タル、由、ニ、テ、先、年、見、中、ハ、修、ヲ、少、修、ノ、先、ニ、ハ、入、ラ、サ、ル、由、  
其、節、修、修、ノ、相、修、也、

右ノ條、池、田、正、樹、院、修、修、ニ、ア、リ、  
重出ノ三條ハ、  
竹白り寺ニ出

一 南、寺、園、毎、十、回、年、制、貢、象、河、後、乾、隆、二、年、八、年、是、使、  
進、古、條、一、山、家、三、三、ハ、リ、少、事、修、修、修、修、人、林、修、修、



信之の如く度平五年ハ付方の元暦十三年春末之

一 名画多樹軸 或 范寛 藤素 波 弟南宮文子等

高志之士文以画自娛人取道吾道者則取教焉貴

能有射軸式今人以孤軸之嫌不足与之吾画矣

未元 孝子元暉世稱亦未即友仁也 指古画傳

按今世之稱多者亦の物種家の之幅射之幅射ある

とのあれをえんくの信有る事と云ふべし

一 古人類画骨平川首末 藤素 藤素 藤素 藤素 故定和

同類骨画用者俯行首也 山世多々骨平画首 諸松

智三書云画至元朝遺一切也 古入善画者多 諸松

此見因物画歴日る

按唐の如くを依て致と画とす可くある今ハ

信之の如く藤子の賛云云宗室御の像賛等

ふあわくのこくを依てりあとのもあろうと云

せしものなるべしと思は

一 古像唐土村之三角の井あり 雜目若鬼子木林也 院

の代之七中板よりあ秀あなる 一印より七印あり 永保四

年五月十九日山印木也 院よりあとの田を耕し 院の

をりあなるものをとこれハ鬼子木林の像なり 院を

あ陽坊の御む 文化代底より 或る年 今の大行院是之所

子院の水きり 院をあら 院の像を 院を あしや

院ハ院に星の清水なり 院の院之 庚午年 六月















久吉馬柳

山手一

きんせ

元吉馬

中徳の修職系書留武始系書月

西丸新田系松平右左衛門尉系書元

吉馬 寛元元年西丸系右河内守松平左衛門尉修職

己未歲明和八年十二月二条立書之元吉馬

古馬 并仲方子祇子有負

日九年八月方子左衛門尉山内能母右松院系書後

田子平内指方子之松院山内守水三年八月廿九

日松院八十三歳之病歿系後志麻谷松院系書

平康平内之没身方子所系後志馬山内九年平内

平九右馬山内之没身中松院系書之病歿修職系

年馬山内之没身方子之松院系書之病歿修職系

志方山内之没身方子之松院系書之病歿修職系

志方山内之没身方子之松院系書之病歿修職系

志方山内之没身方子之松院系書之病歿修職系

志方山内之没身方子之松院系書之病歿修職系

志方山内之没身方子之松院系書之病歿修職系

志方山内之没身方子之松院系書之病歿修職系

志方山内之没身方子之松院系書之病歿修職系

志方山内之没身方子之松院系書之病歿修職系

志方山内之没身方子之松院系書之病歿修職系

志方山内之没身方子之松院系書之病歿修職系

志方山内之没身方子之松院系書之病歿修職系











の通に渡りし者、所此傳之上、新交有る、其後、  
水山、其、作、自、至、山、立、有、者、人、其、趣、亦、立、水、山、節、所、  
急、懸、し、其、言、ふ、水、山、其、山、先、也、作、竹、南、山、月、其、白、  
江、戸、者、人、其、山、山、其、山、其、山、其、山、其、山、其、山、其、山、  
何、く、山、其、山、其、山、其、山、其、山、其、山、其、山、其、山、  
有、其、山、其、山、其、山、其、山、其、山、其、山、其、山、其、山、  
其、山、其、山、其、山、其、山、其、山、其、山、其、山、其、山、

積理梅下門代、山、其、山、其、山、其、山、其、山、其、山、

台、他、院、梅、所、代、道、山、其、山、其、山、其、山、其、山、其、山、  
其、山、其、山、其、山、其、山、其、山、其、山、其、山、其、山、  
其、山、其、山、其、山、其、山、其、山、其、山、其、山、其、山、

其、山、其、山、其、山、其、山、其、山、其、山、其、山、其、山、  
其、山、其、山、其、山、其、山、其、山、其、山、其、山、其、山、  
其、山、其、山、其、山、其、山、其、山、其、山、其、山、其、山、

別紙

由、其、山、其、山、其、山、其、山、其、山、其、山、其、山、

其、山、其、山、其、山、其、山、其、山、其、山、其、山、

文化六年十月廿六日、大、同、月、何、夜、何、分、今、日、為、者、人、  
其、山、其、山、其、山、其、山、其、山、其、山、其、山、其、山、  
其、山、其、山、其、山、其、山、其、山、其、山、其、山、其、山、

其、山、其、山、其、山、其、山、其、山、其、山、其、山、

其、山、其、山、其、山、其、山、其、山、其、山、其、山、其、山、



一説は、（？）の修業中、（？）の西房、（？）の如く、（？）の  
在り、（？）の修業中、（？）の武、（？）の教、（？）の在り、（？）の  
乃、（？）の修業中、（？）の武、（？）の教、（？）の在り、（？）の  
河、（？）の修業中、（？）の武、（？）の教、（？）の在り、（？）の  
是、（？）の修業中、（？）の武、（？）の教、（？）の在り、（？）の  
相、（？）の修業中、（？）の武、（？）の教、（？）の在り、（？）の  
乃、（？）の修業中、（？）の武、（？）の教、（？）の在り、（？）の  
因、（？）の修業中、（？）の武、（？）の教、（？）の在り、（？）の  
因、（？）の修業中、（？）の武、（？）の教、（？）の在り、（？）の  
因、（？）の修業中、（？）の武、（？）の教、（？）の在り、（？）の

日長  
二代目 國院 号 括山

二代目 國院 号 九年

三代目 國院 号 其繩

右三人、（？）の修業中、（？）の武、（？）の教、（？）の在り、（？）の

私

右三人、（？）の修業中、（？）の武、（？）の教、（？）の在り、（？）の

右三人、（？）の修業中、（？）の武、（？）の教、（？）の在り、（？）の

所 依 也

右三人、（？）の修業中、（？）の武、（？）の教、（？）の在り、（？）の

右三人、（？）の修業中、（？）の武、（？）の教、（？）の在り、（？）の

明治九年、（？）の修業中、（？）の武、（？）の教、（？）の在り、（？）の



月支  
松浦忠重

石門河波ちえ死る所は河城の交方より飛入  
水戸の御旨知りし者も幼少なりし御後には  
はるをなむ河波ちえ板を奉るは長月多御中  
右見計附簿中

一 對列より朝解へりし大洲の板相鳴所  
なるを御旨知りし御後には河城の列子三川なる  
とカコこころふりのなる事と云ひしは  
の釋天判、朝解し行り日化し宿品と云事あり  
あはすの年丁亥九月十九日晴沈香と宿品御  
あすの年

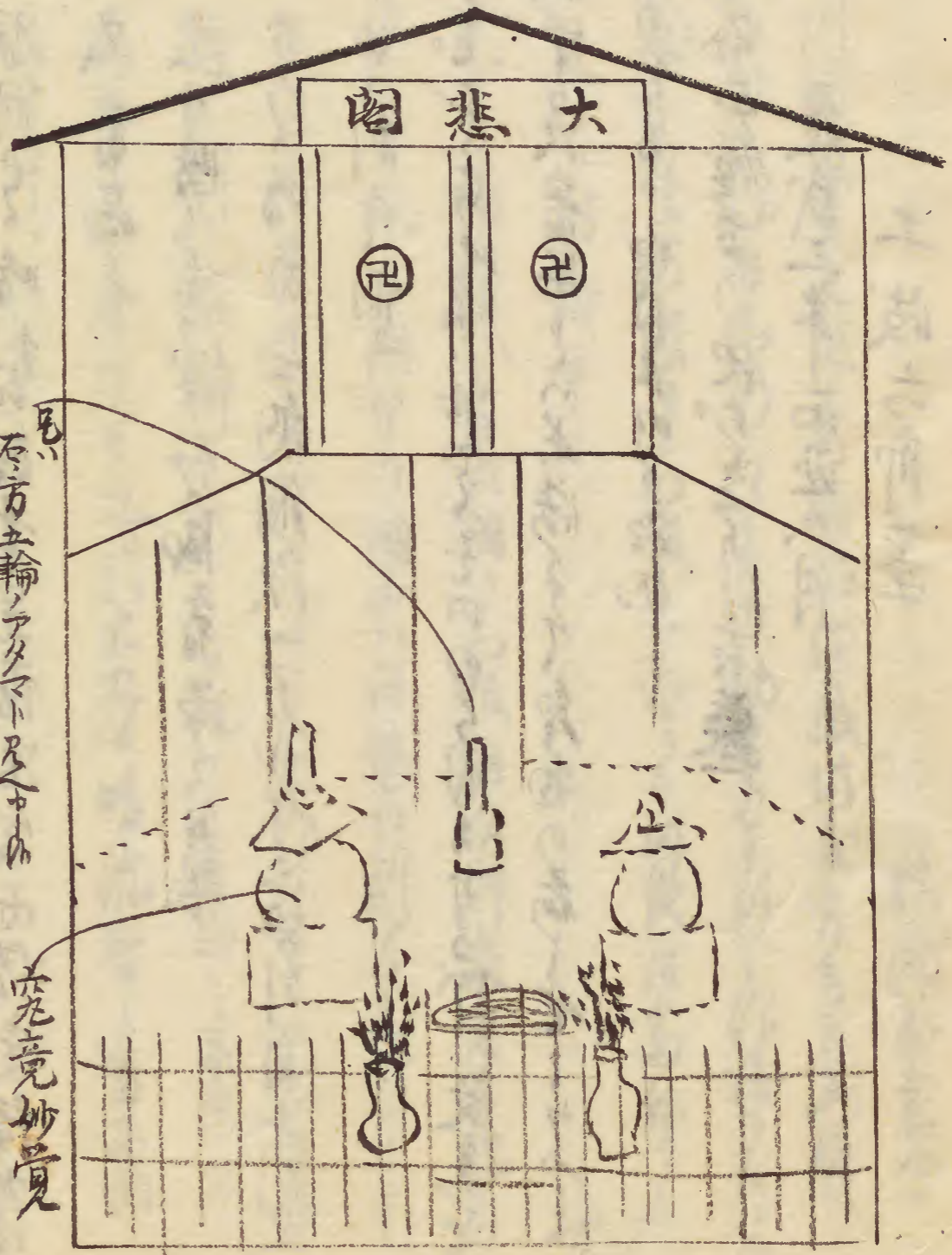
臘月七日晴製紙書呈復送官而借受陸和後  
成宿品

十日晴多く以て宿品御旨と日限  
方々の晴宿品御旨御旨二百五十元行自午刻至  
申刻を御旨

カコこころふ御旨と云事のものより行りし  
御旨に宿品といふ御旨と云事のものより行りし  
との御旨と云事のものより行りし  
一 山谷正燈の地の御旨と云事のものより行りし

建武三年丙午六月  
土波二郎墓





尾  
石方立輪

究竟妙覺

向をふせしるるの儀をいれしとて  
 り居中の同くい世堂ありしとて  
 御茶室ありしとて  
 方南側常設座をいれしとて  
 古くよりいれしとて

此今を便しすといふと  
 文宝

一 漢系智南師發蓮花所居のうき  
 一 萱若松寺の後山に古墓あり

正保二乙酉年  
 素性禪云子

霜月廿七日  
 松平鶴松殿



まて墓のうへに碑の家ありてありの體近々あるありし

俗名三八

- 一 姓河内名字深字權仲号輝竺高井人元禄十五年  
 亥未生大和廣文学居京氏麻布中野前丁の室曆  
 四年甲戌十二月十三日病没享年六十二墓京氏麻布  
 吾学守中村の人著新文源流
- 一 句股金書二卷 菅溪願祥著
- 一 万曆三十二年 程宗海序
- 一 岩井安太郎の源流別字子孫号竺译 以上三条 庚午二月 七月初六日
- 一 慈悲心多し日光山の奥み里升へ入るりしる栗山の  
 多しありて松々の為のことし大なる樹ありて豊

此のうへに日光寺にもありてありて日光寺の物語に

記あり日光寺二十三年の事と云ひしものこと 二月十九日記

- 一 庚午六月九日宮内省に書きたる世に和名君平中書也紙を

うら高柳の尾上のさくら咲きしりしやまのあたりにと

何れかんのうへにありて四月宮内省より書きたるあり

て甲子を成りし書きたる千利保が書きたるせりありて

定長 中書也紙 臨時体文

年一 本此書より定長はりし

定長名史の源流別字子孫号竺译

形似柳切史本此書より定長はりし

所用し作し本此書より定長はりし







為在勝長元為授

日在元荒春也

修共修釋云月

德共施無畏好

慈く濟有界

耳く之味火遠耳

切輪セサ所響重

九提羅索右持

昆盧遮那應真

我聞不動使者

善賢の契

三教寺寺寧院 宗卷

抄降筆

福徳神書

賢大士

十大願王普

無違聖意

向事之間

曼殊の契

惡性之中

善心多矣

七佛の師

曼殊室利

若所淨也人華施

三依條筆

しんまもしんま



荷燈山至奉捧

北嶽園

一 春老元生の物ふ  
軍帳揚々あふりしるる所居のこの写ししるるるふ

糶賤行

東都士民何句。始自孟冬至季冬。海内糶賤諸候困哀。或方今士与農郡國近歲。數有年粟未如土不直。賤。詔有司。候定價。辨令數出。物之然。貴貨賤穀。由上改。困窮無人。索利為号。令愈出。愈不行。黎民何以保性命。高賣何親。威士農何仇。雖未享木却薄。一樂一憂。愁亦未享。為西易處。冠履倒置。皆失。却部。教々不聊生。

在位肉食日暇。緣君不見農。支辛若把鋤犁。秋  
半粟未如塗泥。已知樹穀徒費刀。未年催後事  
夏畦。天下米利相馳。逐那知金錢不如穀。一朝  
不炊。終日飢。金錢寧充人口腹。冠冕君子朝。然愚  
皆道有錢。斯有粟。那國粟未。能如萬。何若  
拳彙之。整谷。不然。能如。相載去。遠向海外。偏  
國鬻。愚哉。四國有粟。可金。買一方。無銀。何所苦。君  
不見。盈虛消息。天道彰。年歲。穰儉。豈有常。安  
知今日如土。未。不為。後來。餓者。糧。勸君。儲。蓄。良  
問粟。用待。凶年。救。飢。荒。

熟荒。事。妙。出。之。也。平。三。

太平紀州







兼應二年 初冬 凡月迄在書の行

右邊より竹の画の後と胡北の去りと云々  
乙丑 其州同月終り

破糸の解名人元  
終日 虚心符鳳来

藤門胡北抄書

乙丑文化二年之書一  
一月終日と夏の長くあつたる也  
其初より終り一  
面白き書なりなり

文化七年 庚子 羊日 雪中記筆

七月中元 前々書り

唐花園

